

「私の論文作法」

「中国軍事問題に挑戦した自己流論文」

茅原郁生（拓殖大学名誉教授）

「50の手習い」、しかもテーマは中国軍事力問題に偏る

私が論文らしきものを書いたのは50歳の時であり、まさに「50の手習い」であった。さらに恥を忍んで申せば、私はそれまでに正規に論文の書き方の教育を受けたこともなく、従ってその論文も自己流の雑文にすぎないのではないか、さらにテーマが中国の軍事力問題に偏るといふ、特異な論文作成法となりそうである。

と言うのも、私は防衛大学校（土木工学専攻）で学び、第1外語に中国語を専攻したが、卒業後はお定まりのコースとして陸上自衛官（3等陸尉任官）になった。当時、米ソ冷戦のまっただ中で自衛隊は北のソ連の脅威にさらされ、如何に国土防衛を全うするかが仕事であった。初任地の北海道第11連隊では30余人の部下と共に、北の国土防衛に向けた訓練に日夜ひたすら励み続けた。30歳台の半ばには中隊長として定員は200余人でありながら、実状は充足率80%以下の人員をやり繰りしながらの防衛任務に明け暮れてきた。これらの時期はテーマを選んで思索を深めるといふよりは、日々の実行力とその成果が重視され、限られた時間内での作戦運用と決断の鍛錬に励み、報告も「結論が先」で理由は「箇条書き的に端的な表現」が求められた。その習性は文書用務にも反映され、簡潔・箇条書き的な文章作製に追われ、およそ論文とは程遠い仕事であった。

佐官に昇任してからは、司令部などでの幕僚業務が増え、私の場合、36歳で陸上幕僚監部（昔の参謀本部）で情報部門の仕事に就き、その延長で外務省アジア局中国課に2年間の出向勤務となり、専ら資料整理と文書書きの仕事が多くなった。そこでは流れるような長文に如何に呑み込みやすく情報を刷り込んで書くかという、外務省流の文書用務の鍛錬を受けた。このように入隊後の約30年間、論文作成とは程遠い現場での実働中心の仕事に没頭してきた。

私の自衛官としての最後の仕事は第7師団司令部幕僚長であったが、7師団は北海道防衛の要と言われ、わが国唯一の機甲師団で、当時は米ソ両国しか保有していない貴重な戦車打撃力であった。7師団は各種7個の連隊を基幹とする約7000人規模の部隊であったが、戦車300両の外に大砲、高射砲などの重機甲車両は600両を超えた。冷戦当時の巨大な戦力の管理・作戦運用で師団長を支える仕事は、文書用務的には赤鉛筆1本でオーケーの承認署名か、企画文の修正指導が中心であった。

折から1991年の歴史的な冷戦終焉があり、私は大臣直轄の防衛研究所（防研）に転勤し、冒頭の「50の手習い」の研究職に就いた。冷戦が終わり、主敵ソ連の消滅に、わが国は今後どこを敵と見立て、何から何を守るのか、極端に言えば使命感と任務さえ見失いそうな時代であった、当時新策定の「防衛計画大綱」は当時から核開発を強行し、ミサイル実験を繰り返す北朝鮮のリスクを防衛対象と定めたが、私個人はやがて中国がわが防衛対象になると見ていた。

防衛省で中国軍事力研究担当に初めに手を挙げる

防衛省ではそれまでは米・ソ連の情報分析・軍事研究が主流で花形であったが、冷戦後はアジア情勢の緊迫化が進み、メディアも中国の動向に注目するような時代を迎えていた。そのような中で中国軍事力研究担当に私が初めに手を挙げた次第であるが、公私ともにそれまでの基礎研究の蓄積や裏付ける公刊資料も乏しく、研究はゼロからの出発と言っても過言ではない状態であった。

しかしわが国の安全保障を担う防衛省へのメディアからのコメント要求は激しく、他方で大臣官房・内局は冷戦後の安全環境急変への備えに忙殺されており、メディアからの大部分の質問は防研

に振り向けており、連日の報道攻勢に悩まされながらの資料解析で、備えが間に合わないまま、その日暮らし的に対応し、研究室の長いすで仮眠しながら泊まり込み奮闘の日々であった。

そのような折に私は組織の要請もあって、自衛官(陸将補)から文官研究職に転官し、アジア研究室長として数人の若手研究者を纏める仕事が増えたが、大きな室長室の一角に簡易ベッドを持ち込みことが出来たのは徹夜の仕事を容易にしてくれた。当時の仕事は、挑発的な軍事行動を繰り返す中国の軍事力の実態評価とその意図の解明であり、自衛官時代に「敵の可能行動」を見積もる手法を駆使しての中国分析が主であった。しかしその背景にある中国人の歴史観や儒教.ものの見方など人文的な特性把握の為の重要な基礎研究はつまみ食いの的に重ねざるを得ず、中国軍事動向の動態分析に励む日々は初老に身には、週2-3回の泊まり込みは、楽ではない厳しい50歳台の日々であった。

振り返って前職務は自衛隊最激務の1つと言われながらも組織的には親身な副官(秘書)始め運転手を含む庶務室のスタッフの支援のお陰で分単位スケジュールの厳しい業務をこなしてきたが、防研では秘書もなく自らお茶を入れ、鉛筆を削り、コピーする研究生活で、今思い返してもよく頑張ったものだと自負できる日々であった。

ひたすら「起・承・転・結」を唱えながらの文書作成

私の論分書きは、無我夢中の中で自らを鍛え、模索したもので、ひたすら「起・承・転・結」を唱えながらの文書作成であった。論文の書き方指導は受けるというより先輩や先行研究者の論文をお手本に、ただ見よう見まねで必要に迫られて書いてきたというのが実態であった。

その防研で最初に書いた論文は、テーマが「中国の核戦力と核軍縮への対応」だった。当時やっとな大陸間弾道弾ミサイル実験に成功し、核抑止力の保有が認められ始めた中国の核戦力の評価と核軍縮への拒絶的な対応姿勢への批判を文章化した。雑誌『国防』（朝雲新聞社）の1992年1・2月号に上下編(1.5万字)として掲載されたものである。

これを皮切りに防研在勤の10年間で、学術論文のつもりで書き、防研の『防衛論集』『防研年報』や『陸戦研究』、拓大の『海外事情』などの学術誌に掲載されたものが38本。雑誌『世界週報』『中央公論』などを中心にメヂア関連への投稿文数は75本。「アジア政経学会」など学会発表や機関誌への報告、防衛省関連の機関紙・誌への投稿論文が32本、と乱造気味ながら一応数だけは書いてきた。特筆すべきは、平成7年5月に「参議院・アジア地域の安全保障環境調査会」へ参考人として招かれ、[中国情勢]として意見開陳が出来たことである。

ちなみに筆者は、拓殖大学が文科省に「国際開発学部」新設を申請した折に認可条件として厳しい教員資格審査の対象になったが、前記発表論文を添付提出して審査を受け、幸い教授として認可された。と言うことは論文として認められたと考え、あれで良かったのかと安堵したことを思い出している。

学生と一緒に考え、悩みながら歩を進める

防研を退職後、拓殖大学の教員に奉職したが、しかし、教員になってからは自己流論文というわけにも行かず、学生指導に当たっては悩んだ末、学生と一緒に考え、悩みながら歩を進めることにした。そこでは「起承転結」に沿った文章体系、論旨の一貫性と主張の筋を鮮明に通すこと、反論的見解にも丁寧に対応すること、簡潔な表現などを強調・指導した。さらに学生には懸賞論文などへの挑戦応募を勧め、お陰様で平成14年度拓大後援会の奨学懸賞論文に1組入賞を果たし、15年度から開始された国際開発研究所・奨学懸賞論文には、ゼミ生を日本人学生と留学生をペアにして、共同執筆で応募するよう勧め、17年度には優秀賞1件を、15年からは毎年2-3組の2位入賞・佳作の成果を合計8組出し、賞金稼ぎの成果で教員の責任は果たせたと自己満足している。

なお論文のテーマについて言えば、私は中国軍事問題を中心に据え、関わり続けてきた。中国の軍事力については、周知のように1980年代に鄧小平の軍事改革により国共内戦で水膨れした解放軍

を政策的な100万人削減の大鉈が振るわれスリム化しながらも核戦力強化を中心に質的軍事力の強化を進め、世界の注目を集めてきた。1990年時代になって力をつけてきた中国は、江沢民時代から国防費を急増し軍事力を強めて周辺に挑発的行動を反復してきた。

そして周知のように今日でも中国の軍事問題には、世界の関心がますます集まっている。中国軍事力の現状は空母4隻体制を目指す中で、現に[遼寧][山東]2隻が実戦配備、台湾問題の浮上に伴って海兵旅団や強襲揚陸艦の増強、さらに第5世代のJ20戦闘機の実戦配備など兵器の近代化や島嶼上陸の軍事演習の多発との進展が注目されている。ここではこれ以上に中国軍事力の内容的な記述は控えるが、大国を自認する中国の軍事力強化の姿勢には今後情報公開の要求はますます強く求められよう。

機密のベールで覆われた因果な仕事

それは中国の軍事面に於ける透明性の向上と列強国並みの軍事情報の公開の勧めである。言うまでもなく軍事力解明・評価に関してはいづこの国も最高の機密のベールで覆っており、因果な仕事であるが、それにしても中国軍事の公開性は低くすぎる。中国が掲げる「偉大な中華の復興」を目指し建国百周年までに世界の最前列に立つ強国路線の中核に軍事力強化を据えている限り、その透明性が大国の責任として求められよう。

なお参考までに筆者のこれまで書いてきた本もまた全て中国軍事関連で『中国軍事論』（芦書房・1994.3、日本防衛学会第6回加藤賞受賞）、『安全保障から見た中国』（頸草書房、1998.10）『中国軍事大国の原点』（蒼蒼社・2012.3、第24回アジア太平洋賞特別賞受賞）『中国人民解放軍』（PHP新書、2019.9）となっている。

なお新しい趨勢として、大国の闘ぎ合いには、軍事力で競う戦争の外に近年は宇宙空間、サイバー・電磁波空間での争覇も増えている。角逐が激化する米中争覇では利用空間の拡大に伴うハイブリッド戦争が増えると言われているが、有事と平時の間のグレーゾーンも増加の趨勢にあり、戦争手段としての軍事力の役割も変化してこようが、いつまで中国軍事力が論文テーマとなり得るか、トンでもないテーマに飛びついたものだと我ながら呆れているのが昨今の実感である。了